

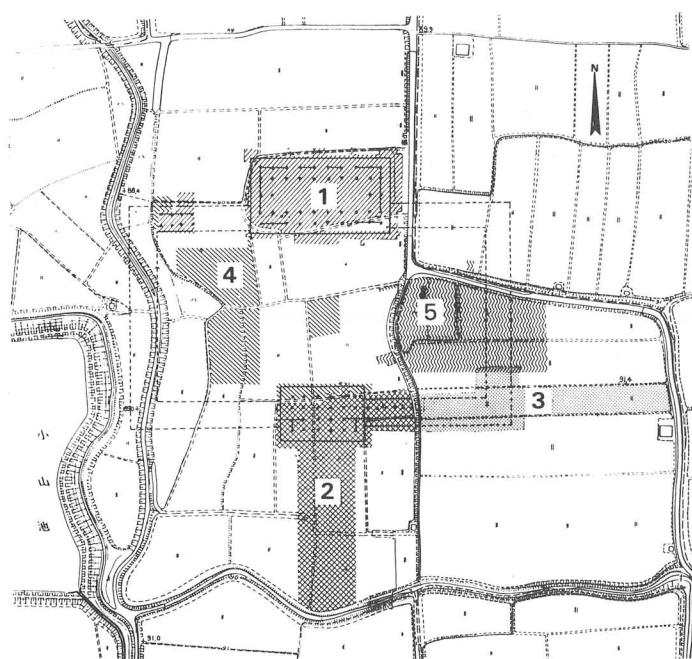
大官大寺第5次（塔・東面回廊）の調査

（昭和53年7月～昭和54年2月）

今年度の調査は、塔跡を中心に、東面回廊の一部をも含む範囲を対象として実施した。調査地は、塔跡とみられる土壇状の畠と、その東と南に接する水田であり、東面回廊部分では第3次調査区と一部重複している。調査の結果、当初の予想通り、塔と東面回廊を確認し、他に井戸・溝などの遺構を検出した。

1) 塔跡SB200 発掘前の塔跡は、周囲から1.2mほど高まる土壇であり、南西部がやや突出する南北27m、東西24mの不整形な畠地であった。土壇上には、明治22年まで心礎をはじめとする礎石多数が残っていたが、この年、これらは橿原神宮の造営資材として搬出され、現存するものは一つもない。

〔基壇〕 塔基壇は、水田耕作によって四周を一段低く削平されていたが、調査によりほぼその規模を明らかにすることができた。なお基壇の北と西辺については、部分的なトレンチ調査にとどめた。調査の結果、当初の基壇規模は、



調査地位置図 (1:3000) ※数字は調査次数

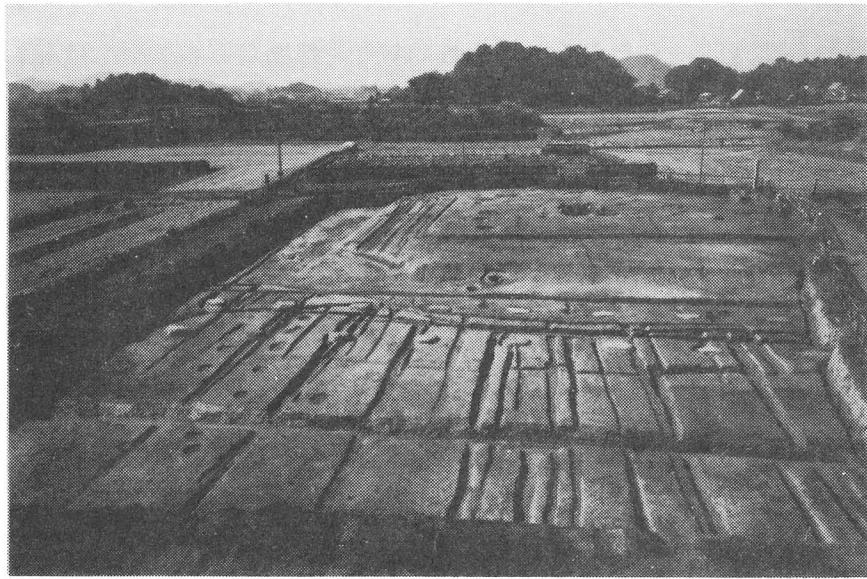
東西36.3m、南北37.3mあり、現状土壇を大きく上回ることが判明した。基壇縁には基壇化粧の痕跡がなく、約25度で立ちあがる傾斜面となっており、この傾斜面と基壇裾部には、焼土や瓦が多量に堆積していた。

基壇は、灰色・茶褐色・黄色土を3～10cmの厚さで相互に積みあ

げ、版築し築成したものである。基壇の築成に際し、西辺部では整地土を30cmほど掘込んでいるものの、他の3辺では直接旧地表面に土を積み、掘込みは認められない。また、基壇中央付近に限り、拳大の礫を入れる地固めの基礎地業が認められた。基壇築成後、基壇裾部に排水施設かと考えられる溝(幅約80cm、深さ20~40cm)をめぐらすが、この溝は基壇上部からの流出土によって、比較的短時間のうちに埋没したようである。溝の埋没後、掘直しは行われず、溝が完全に埋った段階で基壇裾回りにバラスが敷かれている(SX 402)。バラス敷は、基壇南縁部を中心に認められたが、その敷き方は乱雑であり、さらに塔焼失時には、上面を厚さ約10cmの砂質土で覆われていた状況が知られる。このように、塔基壇の造作が外装の工程にまで至っていないため、基壇土の流出が著しく、当初正しく方形を呈した基壇もしだいに変形していったものと思われる。従って、先述した溝の底面内側を築成計画に基づく基壇縁として捉えると、一边35mの正方形基壇が復原できるのである。基壇の現存高は、バラス敷面から1.2mであるが、後述する礎石の大きさからみると、本来は2m近くあったものと考えられる。なお、階段の痕跡は認められなかった。

〔礎石抜取り穴・据付け掘形〕 基壇上面は、耕作による搅乱が80cmの深さにおよび、遺存状態は良くなかったが、調査で礎石抜取り穴と据付け掘形7ヶ所を検出することができた。抜取り穴は、橿原神宮造営時のものと判断できる。側柱では、南列東第1~3・5と北列東第4の計5ヶ所で抜取り穴を確認し、このうち後3者では据付け掘形をも検出した。入側柱では、西列南第2の1ヶ所のみで据付け掘形底部を検出したにすぎない。なお、抜取り穴には、搬出の際に礎石を打ち割ったものと思われる花崗岩の破片が残る。

心礎抜取り穴は、南北5.6m、東西5.4mの大きなもので、深さは現基壇面から1mほどある。抜取り穴には、根固め石が数個遺存するとともに、根固め石の痕跡も多く認められ、心礎は径1~1.5mの花崗岩玉石で固定されていたことが判る。また、心礎の据付け掘形がみられないことから、基壇の築成に先だって心礎が据えられた状況が把握されよう。心礎は、明治初年に岡本桃里が画いた「礎石配置図」によると、南北12尺、東西10尺の巨石である。その中央



調査地全景（東から）

部には径4尺の円形柱座が彫り込まれ、さらにその中心に舍利孔をもつ。本薬師寺東塔の心礎と同形式のものである。なお、四天柱礎石の抜取り穴や据付け掘形などは、一切検出できなかった。心礎の大きさを考慮すると、四天柱礎石を置く余地はなく、当初から存在しなかった可能性が大きい。この他に、基壇上からは塔造営に伴う足場穴S X 401を検出した。これは、東西両入側柱列と心礎の間を南北にならび、東西柱筋のほぼ中央に配されている。S X 401の掘形のいくつかには、角柱の痕跡（ $30 \times 20\text{cm}$ ）が残っていた。

以上の調査結果から、塔初重の平面形は方5間に復原できる。これは、岡本桃里や明治37年に礎石抜取り穴を実測した本沢清三郎の記録と一致する。しかし、柱間寸法については、本沢氏の実測値11尺より小さく、一辺50尺（各柱間10尺等間）とする方が、遺構によく合致する。一方、塔基壇の規模は、基底部で一辺35mもあるから、塔初重の雨水は基壇上に落下することとなる。それがまた、先述したような基壇土の流出を早める原因となつたのであろう。

2) 東面回廊跡SC 051 東面回廊は、第3次調査で回廊東南隅から4間目までを確認している。今回は、11間目までの7間分を新たに検出した。礎石は、すべて原位置をとどめており、柱間が桁行3.9m（13尺）、梁行4.2m（14

尺) 等間であることが判る。礎石は、径 $1 \sim 1.4\text{ m}$ の花崗岩で、平坦面を上部に、長軸を棟方向にそろえて据えられており、柱座などの造出しはもたない。礎石の上面高は、北に向って徐々に下降し、発掘区両端で約 15 cm の差がある。

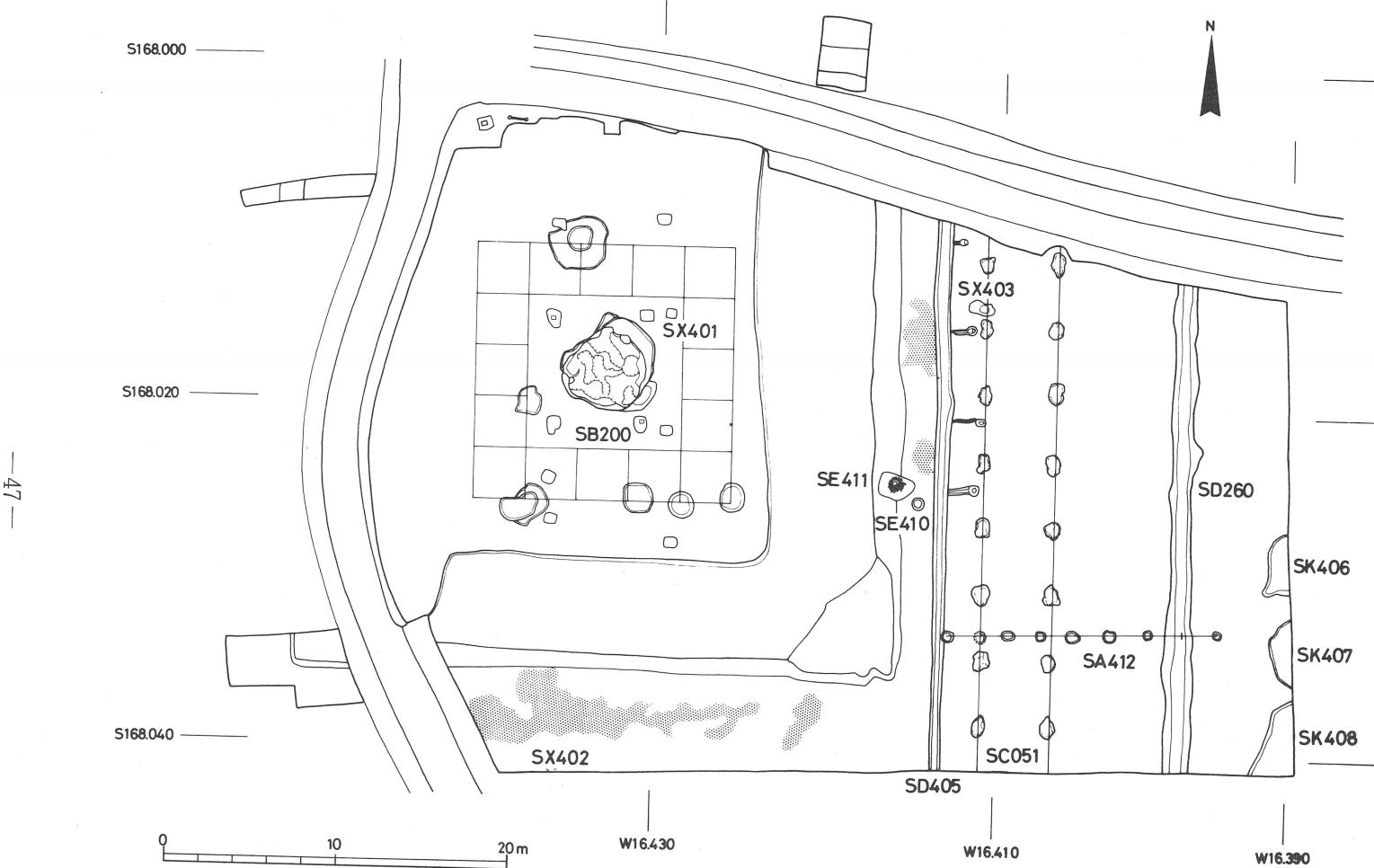
回廊基壇の上面には、火熱をうけて赤変した部分が残り、火災にあった状況を示している。回廊ではまた、ずり落ちたままの状態で屋瓦が出土した箇所がある。これは回廊倒壊に伴うものと思われ、軒平瓦や熨斗瓦の出土に対して、軒丸瓦が出土しない点、注目されよう。

回廊基壇は、西方に緩く傾斜する黄褐色地山土の上に、 $10 \sim 30\text{ cm}$ の厚さで数層を積み上げて築成したものである。礎石の据付けは、基壇築成途上に行う。すなわち、積土中に径 $1.6 \sim 1.8\text{ m}$ の掘形を穿って礎石を据え、その後、掘形内部を版築状につき固めている。なお、南面東回廊では、基壇築成に先行して礎石が据えられたことが判明している。

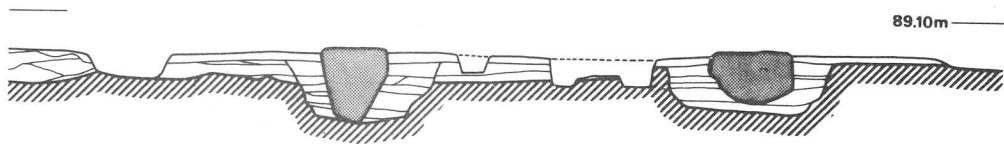
回廊西側柱筋と塔基壇東縁部のほぼ中間には、幅約 0.6 m 、深さ 25 cm の素掘り溝 S D 405が南北に走っている。この溝は回廊基壇を切って掘られており、塔焼失時には、塔基壇からの流出土により大半が埋っていたようである。第3次調査で検出したこの溝の南延長部は、東面回廊の3間目中央付近で西へ折れまがる。したがって、この溝をただちに東面回廊の西雨落溝と考えることはできないが、塔基壇と回廊が近接しすぎるこの部分においては、回廊の雨落溝をも兼ねた排水溝として理解するのが妥当ではなかろうか。もしそうであるなら、溝 S D 405によって、これまで必ずしも明確でなかつた回廊の規模が復原できるのである。すなわち、回廊の軒出が 2.4 m (8尺)、基壇幅が 8.4 m (28尺) となろう。



東面回廊 S C 051・溝 S D 260 (北から)



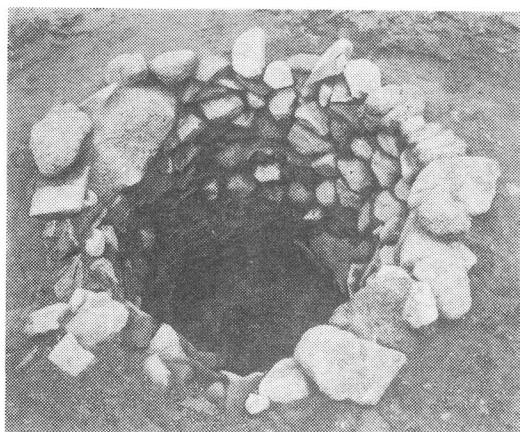
大官大寺第5次調査遺構配置図（1:400）



回廊基壇断面図 (1:80 S 168, 018. 80 ライン)

3) その他の遺構 大官大寺焼失以前の遺構には、S D 260・S K 406～408がある。S D 260は、平均幅1.5m、深さ0.5mの南北溝で、その南延長部は第3次調査で確認している。溝底は北に向って20cmほど下がる。最下層の青灰粘土層には、手斧の削り屑などの木片が多量に含まれ、木簡の削り屑2点も出土した。この溝は、白土や熨斗瓦が一括投棄された状態で出土することや溝埋土の状況から、回廊焼失時までには人為的に埋戻されていたものと考えられる。S K 406～408は、発掘区東端南寄りにある土塙群で、いずれも不整形な平面と約10cmの深さをもつ。これらは二次的な火熱をうけていない瓦を出土するから、焼失前に掘られた土塙であることが判るが、性格は不明である。

大官大寺焼失以後の遺構には、S A 412、S E 410・411がある。S A 412は、東西に走る8間の掘立柱塙である。柱間は、西4間が1.8m(6尺)、東4間が2.1m(7尺)であり、柱掘形内には焼瓦が入る。S E 410は、深さ80cmの素掘りの井戸であるが、遺物を伴わず時期はさだかでない。S E 411は、塔基壇東縁部で検出した乱石・瓦積みの円形井戸である。焼土・瓦層を掘込む井戸掘形は、平面台形で南北1.3m、東西2.0m、深さ2.2mをはかる。井戸



井戸 S E 411 (東から)

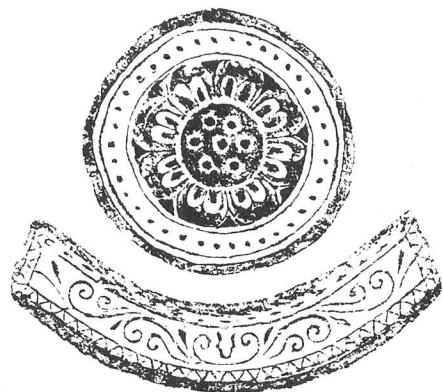
側壁は、焼瓦と礫石とを交互に積みあげて作り、底面には4段重ねの曲物を据えている。掘形および井戸埋土から瓦器が出土した。それによってこの井戸が、13世紀中頃に構築され、13世紀末ないし14世紀初頃に廃絶したことがうかがえる。なお、井戸の埋土中には、埋井儀礼に伴うとみられる竹管が入っていた。

4) 出土遺物 調査によって、瓦

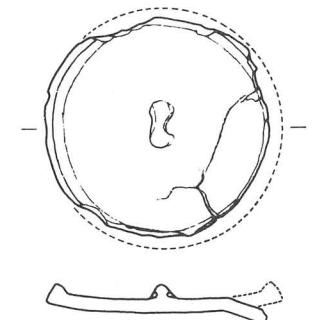
土器・金属製品などが出土した。

瓦は、塔基壇の周辺から多量に出土したが、そのほとんどが二次的な火熱をうけて脆弱化し、小片となっていた。軒瓦は、軒丸瓦6231—軒平瓦6661型式のいわゆる「大官大寺式」に限られる。総出土数約1200点のうち、軒丸瓦では6231Cが、軒平瓦では6661Bが全体の9割以上を占めており、塔所用軒瓦の組合せが判明する。大官大寺所用軒瓦については、これまでの調査で、「講堂」が6231A—6661A、中門および回廊が6231B・C—6661Bの組合せをもつことが知られているから、今回確認できた塔所用軒瓦の組合せ6231C—6661Bは、中門・回廊に類似することとなる。なお、道具瓦としては、熨斗瓦と面戸瓦が出土している。

金属製品には、金銅製隅木端飾金具・金銅製風鐸・小銅鏡・銅釘・鉄釘などがある。これらは、塔基壇の周縁に堆積した焼土・瓦層から出土した。隅木端飾金具は、すべて断片となり全形をうかがえないが、方形の枠内に透し彫りの唐草文を配し、周縁に沿って毛彫りを施すものである。表面に鍍金の痕跡をとどめる。「講堂」出土品と酷似するが、「講堂」出土品が0.2cmと薄手であるのに対し、塔出土のそれは0.5cmの厚さをもち、さらに文様の細部にも違いがみられる。風鐸は、断面扁円形の身部を重帯の袈裟襷文で区画し、上部に乳を配したもの。断片で出土したが、復原すると総高30cmをこえる大型品となり、四天王寺出土の風鐸に近似すると考えられる。小銅鏡は、径4.7cm、縁厚0.4cmの素文小鏡であり、塔東辺の瓦層から出土した。安倍寺や薬師寺金堂本尊須弥壇から類品が出土しており、鎮壇具の一つとみてよいだろう。銅釘は、頭部を半截球状に作る。飾金具の固定に用いられたものである。



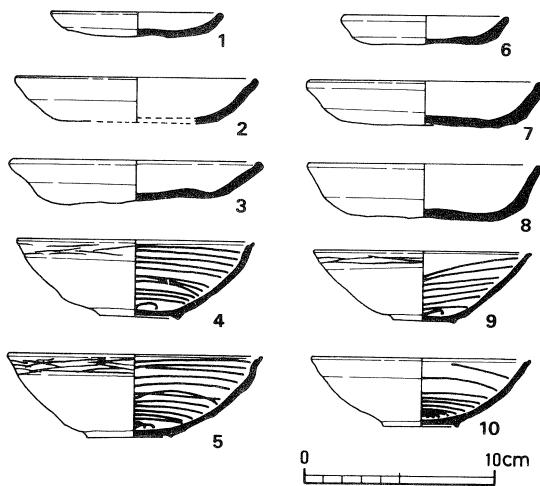
塔所用軒瓦 (6231C—6661B型式 1:6)



小銅鏡 (1:1.5)

土器は、縄文式土器、弥生式土器、7・8世紀の土師器・須恵器、中世の瓦器・土師器が少量出土した。図示したものはSE 411出土の瓦器椀・土師器皿である。

この他に、焼けた壁土がかなりの量出土した。藁スサ入りの荒壁の上に、0.5～0.8cmの厚さで直接白土を塗って仕上げたもので、塔の土壁と考えられる。



SE 411 出土土器実測図 1～5—井戸枠内, 6～10—掘形

5) まとめ 大官大寺の塔は、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に九重塔とみえ、百濟大寺以来、大安寺に至るまで、主要堂宇の中でとくに塔を重視する伝統がうかがえるのである。今回の調査によって、大官大寺の塔は、方5間で一辺50尺の平面をもつことが明らかになった。方5間の側柱が、塔としては特異なため、これを裳階とみる説もあるが、四天柱礎石が存在しない点に留意すると、裳階のない5間の塔と解するのが妥当であり、構造上きわめて特殊な塔であると推測されよう。

一辺50尺の塔は、飛鳥・白鳳期に類例がなく、日本最大の塔として知られる東大寺七重塔につぐものである。東大寺七重塔は、方55尺の規模をもち、高さが東塔33丈8尺7寸、西塔33丈6尺7寸と記録に残り、100mをこえる塔であったことが知られている。大官大寺の塔が、九重塔であったか否かは、発掘遺構からだけでは判断しがたい。しかし、それまでの諸寺の塔をはるかにこえる巨大な規模の塔であったことはまちがいのないところである。百濟大寺九重塔以来、大規模な塔の造営を志向した特殊な由緒を考慮すると、九重塔の可能性はきわめて高いものといえるだろう。

さて、塔の造営は、基壇の外装工程には至っていないものの、焼失時の焼土層から、隅木端飾金具・風鐸・白土が塗布された壁土、さらには朱の付着した軒平瓦などが出土しているから、塔建物はすでに完成していたことが推察され

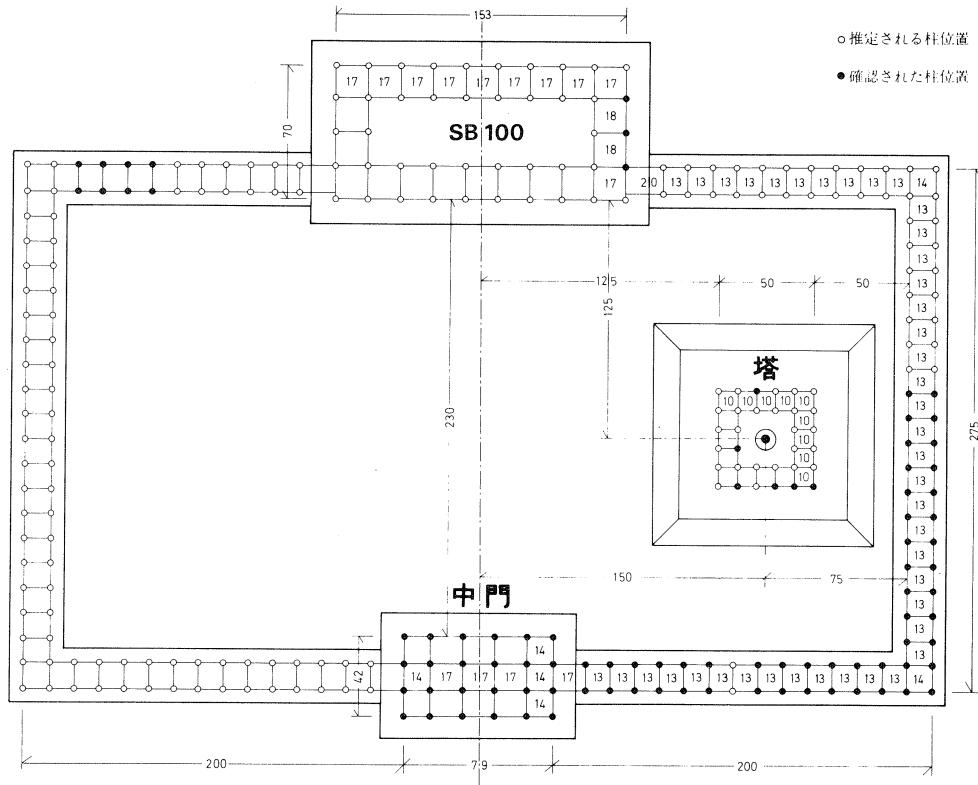
るのである。これまでの調査によって、大官大寺焼失時、「講堂」は基壇の外装を完了していたこと、中門は足場が組まれた未完の状態であったことが明らかになっている。すなわち、「講堂」→塔→中門の順に主要堂宇の造営が進められたことが判る。また、各建物の所用軒瓦については、先述したように2つのグループに分けられるから、塔の造営時期は、「講堂」よりも中門・回廊の造営時期に近接するようである。したがって、大官大寺の焼失時期を『扶桑略記』にみえる和銅四年（711）と考えると、塔の造営時期もそれを大幅に遡るものとは思えない。『続日本紀』や『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に記載のるように、文武朝の造営とみるのが妥当であろう。

つぎに、大官大寺の伽藍配置計画について簡単にふれておきたい。大官大寺の伽藍配置については、金堂想定位置に金堂を確認できなかったことから、法起寺式ないしは筑紫觀世音寺式とする従来の考え方が否定されるに至った。その結果、当初「講堂」と考えた建物SB 100が、金堂である可能性を生じ、伽藍配置の復原は、なお流動的である。以下では「講堂」をSB 100と呼び、伽藍の配置計画を復原してみよう。なお、基準尺は、1尺30.0cmに換算できる。

発掘調査した建物のうちで、最も早く建立されたSB 100は、桁行9間（総長153尺）、梁行4間（同70尺）の規模をもつ。また中門は、桁行5間（同79尺）、梁行3間（同42尺）であり、これは南面回廊と一体のものとして配置設計がなされている。回廊の南北長、すなわちSB 100の南入側柱列と中門南入側柱列との距離は275尺あり、中門の北側柱は、SB 100の南側柱から230尺、SB 100の北側柱から300尺の位置にあたる。回廊の東西長は、479尺をはかるが、これは中門の桁行総長79尺に東西各200尺を加えたものである。また、回廊内郭の東西距離は、479尺から回廊の梁行長28尺を減じたもので、450尺を基本に計画されていたことが判る。塔はこの回廊内郭の東側に位置し、伽藍中軸線から東150尺と、SB 100の南側柱列から南125尺との交点に心礎がある。この東150尺の数値は、伽藍中軸線と東面回廊内側柱との距離222.5尺の3分の2に相当し、南125尺は、SB 100南側柱列と中門中心線との距離251尺の半分にはば一致している。また塔の基壇についても、その北縁がSB 100

の中心から南 100 尺の位置に揃い、西縁も SB 100 基壇の東北隅と東南隅で検出した 2 つの榜示石を結ぶ線上に位置するなど、その配置に一定の計画性が認められるのである。

さらに、伽藍配置全体についてその均衡をみると、回廊が著しく横に長いのに気づく（縦横比 1 : 1.75）。これに対し、塔の位置は東に偏しすぎた感が強い。調査では、塔と対称の位置に遺構を検出できなかったが、仮に、伽藍中軸線を中心とする塔と対称的な建物が計画されていたとするとき、塔との距離が 250 尺となり、SB 100 のような奥行の深い建物をそこに想定することは困難であろう。そこで、ほぼ同時期の本薬師寺や後身の大安寺が左右対称に 2 基の塔をもつこと、さらに平城京の諸官寺が 2 つの塔を基本に計画されていることなどを勘案すると、大官大寺についても当初 2 基の塔が計画されていた可能性が生じるのである。今後 SB 100 の性格づけとともに検討すべき課題である。



大官大寺伽藍復原図 (1:1200 単位=尺)